

第2章 実践事例

1 小学校 ～無気力な児童が不登校に陥った事例～

A子は、両親と祖父母に甘やかされて育ち、嫌いなことに我慢して取り組むことはほとんどなかった。学習意欲もなく、小学校1～4年生の1学期まではたびたび登校をし、母親と一緒に登校したり、担任や友人が朝迎えに来て登校していたが、4年生の2学期から全く登校しなくなった。

自宅には不登校の中学2年生の兄がおり、祖父母はこんな兄妹に「無理して行かなくてもいい」と話している。A子も兄も起きたいときに起き、食べたいときに食べ、テレビやビデオを見て一日を過ごしている。

母親は、兄が不登校になったとき、学校からの勧めで母親だけ教育センターへ通ったが、改善されないことや、自分自身がパート勤務を始めたことを理由に通うことをやめた。

その後両親は「何とかなさ」という楽観的な気持ちとなり、登校を促す働きかけをしなくなり、A子は、時々訪問してくる担任や学級の友だちとも会わなくなった。

母親は、学年末のある日、A子を車に乗せて無理やり学校に行ったが、車から降りようとせず泣き叫んだため、それ以降は登校させようとしなかった。

子どもの前兆
行動(サイン)
の発見

担任や保護
者の気付き



状況把握



早期発見・
対応

1 小さな変化を見つめると前兆行動(サイン)が見える

【家庭での発見】

- すぐに怒ったり、文句を言うようになる。
- 昼過ぎから元気が出るようになる。
- 頻繁に体調不良を訴える。特におなかが痛いと言うことが多くなる。
- 食欲があまりないと訴え、家族と食べようとしなくなる。
- 仲の良い友達との接触を拒むようになる。

【学校での発見】

- 遅刻や欠席、早退が多くなっていく。
- 身体的不調(腹痛など)を訴え、保健室によく行きたがる。
- 授業中ぼんやりしていることが多くなる。
- 学級での取組のときに、自分の思いどおりにならないことに対して不満を述べる。

2 校内や学校・家庭との情報交換の充実を図る(情報連携・行動連携)

多視点的な
情報収集

・情報連携
・行動連携

家庭生活における
保護者の気付き

地域からの情報提供

地域など
における
気付き

密接な情報交流
と行動連携

学校生活における
担任などの気付き

地域からの
情報提供

・多視点から子どもを見つめるために、家庭や地域と常に情報を取り合えるよう日頃から連携を図ることが大切です。

情報の
分析

実態把握

組織的・継続的な取組の推進

- ・校内体制
- ・サポートチーム など

関係機関と連携した取組の実施

- ・適応指導教室
- ・スクールカウンセラー
- ・児童相談所
- ・民生委員・児童委員
- ・医療機関
- ・その他、相談窓口での相談

3 具体的な指導方針を立て組織的な指導を行う

心が揺れ動く時期の子どもの行動を事前に的確に把握し、未然防止することは難しいことです。時として、何となく問題かなと感じていた子どもの行動が、「この程度のことなら大丈夫」と思い込んでしまい、後になって「ああ、あれがサインだったのか」と後悔することになりかねません。

複雑さを増した子どもと社会環境の下では、前兆行動（サイン）に気付けるよう保護者や教師の「問題感知センサー」の感度を高める必要があります。そして、様々な情報を持ち寄り、具体的な指導方針を立てることが大切です。

具体的指導方針

- ・担任一人に任せず、学年や全校の指導体制を確立する。
- ・学校が中心の指導、家庭が中心の指導、さらに関係機関等との連携を図って行う指導を考える。
- ・「登校させること」だけを目標にせず、子どもの自立を促すとともに、保護者のストレス等への配慮も行って指導に当たる。

4 指導の実際と留意点（関係機関との連携）

- 本人にとって魅力がありそうな学校行事や特別活動は、必ず知らせ、担任も級友も待っていることを伝えるようにする。
- 担任は、いつ登校しても級友が温かく迎え入れることができる学級づくりに努める。
- 本人と会えない状況が続いたとしても、気長にかかわり、家族へ学校の様子を伝え、何かのきっかけで子どもが自ら行動を起こせるよう心がける。
- 保護者の心の辛さや気持ちを理解し、学校と家庭がともに改善に向けた指導を目指す。
- 学校という集団学習の場で人間関係を学ぶ意義について保護者に理解を求める。
- 長期間に及ぶ不登校の場合、教育センターや適応指導教室等の関係機関との連携を考え、保護者へも通所するように働きかける。

■本事例におけるポイント■

生徒の前兆行動（サイン）

- 少しずつ欠席が増えていった。
- 学校がつまらないうつぶやいていた。
- 明るさがしだいになくなっていった。
- 身の回りの片付けができない。

教師や家庭との対応等

- 子どもとの会話から変化を感じ取った。
- 子どもの学校生活の記録化に努めた。
- 家庭との連絡を定期的に行った。
- 教師自身が指導力向上に向けた研修の充実を図った。